

作 川口幸宏

知的障害を持つ子どもたちの教育を切り開いた人の自立への旅



第2回

「先生様」

写真の道路を挟んで左側がかつてのセガン家、「先生様のお館」の一部です。これ表側だと思われていますが、セガンが生まれた時に届け出られた住所オ・バー・プティ・マルシェ通り（現在名：クロード・ティリエ通り）に沿った方の入り口がある面です。長い間住む人もなく、今は不動産屋の所有物件となっており、公開されておりません。



クラムシーのセガン家は一代限りであったことを前回お話ししましたが、これ、偉人伝を書く時にすごくやりにくいんだそうですね。氏索性がしっかりしていて、しかも伝統と繁栄があって、だからこそ社会に貢献するようなできたお人になった、とした方が受けがいいんですね。あ、やっぱりうちと素が違^{もと}うお人やねー、ということでしょうね。セガンが、1880年の10月の終わり頃、ニューヨークで亡くなったときに告別式が行われておりますが、友人のプロケットという人が弔辞の中でこんなことを言っておられます。「彼は優

秀な家系の生まれで、先祖は数世代にわたって医師として名をあげ、その地域ではその道の最高位を占めていました」。ね、すごいでしょ？でも、弔辞の誉め言葉を真に受けてそれが寸部違いなく本当のことだと、信じ込んで伝記を書くのも、どんなものでしょうか。これまでのあらゆるセガン研究がその誤りの轍を踏んでおります。

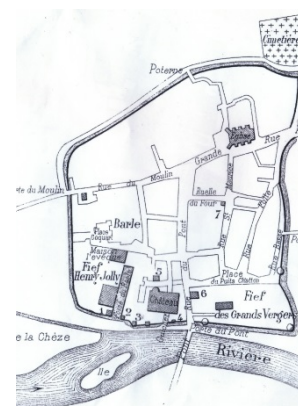
一代限りとはいえ地元の名士さまご夫妻のことです。時代にふさわしく、父親ジャック＝オネジムは医学博士でしたから「先生様」とお呼びし、母親マルグリット・ユザンヌを「奥方様」とお呼びしましょう。まじめな話、クラムシーのセガン家の住まいは「先生様のお館」と呼ばれていたんだそうです。個人持ちの2頭立ての馬車を所有していたようで、今で



もお館跡には馬車門が残っております。左写真の狭い通路を挟んで左側がセガン家。道の突き当たりのすぐ左側に馬車門跡があります。この通路、セガンが生まれた当時は袋小路ではなく、街の結構主要な役割を果たしていたデ・ピリエ通りと言いました。両親の死亡届に記されている自宅住所がデ・ピリエ通り6番となっています。今の目に写る先生様のお館は、正直、ボロいですね、いっちゃあなんですが。

先生様は、ニエヴル県の北隣のヨンヌ県のご出身です。そういっても、クラムシーとは山一つ超えたほどの距離で、やはりヨンヌ川沿いの、クーランジュ・シュール・ヨンヌという人口が500人ほどの、小さな小さな、やっぱり中世からの伝統のある寒村のご出身です。1781年生まれといえますから、あのフランス革命のほんの少し前のお生まれなんですね。先生様のお父さまはフランソア・セガンさん、お母さまはマ

リ・テレーズ・ギマルールさんといいます。この村のとても裕福な材木商であり、村の三役をお務めになるほどのお偉い方でした。「クーランジュのセガン家」といわせてもらいます。でもやっぱり入植者です。生粋の土地っ子ではなく、よそ者の成り上がり者、という目で見える人が多かったんちがいますかね。先生様はクーランジュのセガン家の末っ子に産まれました。きょうだいは多かったようですよ、戸籍に残されているのは12人です。嬰兒や乳幼児の死亡率がとても高い時代でしたから、戸籍（教会に保存されている洗礼者名簿）に残らない子どもさんもいたと思うんですけどね。



リはクーランジュの航空写真。これが現在の様子です。写真右に大道路が走っていますが、新しくできたもので、昔からの道は左側にある橋の道です。その下の図版は城壁で囲まれたクーランジュです。右上の方の黒く塗り込まれているのが、この地域を領する小教区教会。現在もこの教会は立派な役割を果たしています。その他の黒く塗られているのはこの地域の経済的支配者のお館。16世紀の地図ですので、クーランジュのセガン家はこれには描かれていません。お館が川沿いにあることは注視すべきことです。その理由は後の回の話しでおわかりになることでしょう。その下の写真は、この村で「セガン」姓を受け継いでいた「家」の現在。大革命期のセガン家（つまり、クー

ランジュのセガン家)の末裔なのかどうかを確かめたかったのですが、「私の3代ほど前に木こりはおりましたそうな」というご返事。

さて、話を戻します。この時代のハイソの家には、因習的な育児観と方法とが支配しておりました。ハイソを自覚すればするほどその因習に従ってさらにハイソ感を強めたんでしょうね。それは何かと言いますと、両親は子どもを作るが子育てはしない、ということです。そんなアホなとお思いかもかもしれませんが、父親はいうまでもなく分限(身分と地位)を守るために、仕事と社交に精を出し、母親はハイソにふさわしい家風づくりに勤む、夫とともに社交に精を出すというわけで、「おぎゃー」と生まれたすぐその時からその子は親から^{ほにゅう}哺乳されることなく、乳母に任せられました。これがだいたい3歳ぐらいまで。「母性本能」なんて言いますが、近代に入って、女性を家庭にはり付けておくために作られた言葉、思想なんだってことを、歴史を見る時には知っておきたいことなんです。その端緒がルソーであり、フランス革命期の女性観であり、実質化を進めたのがナポレオン1世……。



左の図版は、乳母家族の生活の一コマです。乳母には、住み込み乳母、通い乳母、預かり乳母の3種類がありました。乳母資格もちゃんと設けられていて、乳母は、乳母が産んだ子どもを預かりの乳児と一緒に育ててはならない、ということです。それは、乳母の子どもは乳離れをしてい

なければならない、ということの意味しています。ちゃんとそのことが証明されなければ、乳母業はできなかつたんですよ。我が日本には、「乳母兄弟」という言葉があって、イメー

ジとしては、右の乳房に預かった赤児、左の乳房に我が赤児を、というのですが、それはまかりならん、というわけですね。セガンの生まれた地方にはモルヴァンという山村があり、ここの若いお母さんの乳は良質だということで、遠くはパリの貴族や富豪の家庭にまで乳母として出稼ぎに行ったそうで



す。「乳母の里」と呼ばれていたんですね。最近、映画にもなりました。乳母となった母親は、自分の子どもを捨てたようなものなのでしょう。

左の図版は赤ちゃん用の風車売り。「かわいい赤ちゃんにお一ついかがですか？」と歌いいながら、売り歩いていました。先生様も風車であやされたのでしょうか。

じゃあ、3歳が過ぎたら子どもは親の手に戻るのかい？いいえ、とんでもございません。里子に出されます。7歳ぐらいまでの里子期間は里親から五官の訓練、社会性の基礎の訓練、情緒の訓練を受けます。有り体にいえば、屋内外での遊びやおとぎ話・教訓話、厳しい体罰が主となっていました。

もちろん、里子に出されないで、同居する乳母が引き続き育児にかかわることもあるわけですが、そのような場合に母親の出番があります。どういう出番かという点、「監督責任」つまり悪さをしないかの見張り番であり、その家にふさわしい品を保つことのできる^{かんよう}道徳性の涵養にあったのです。今で言う「両親の一杯の愛に包まれて幸せな子ども時代を過ごした」(松矢勝宏)ってのは空中楼阁のお話なのです。

その期間を過ぎると、やっと両親の元に戻れるのか、やれやれ……。いいえ！里親が引き続きかかわることがありますが、もしその里親に知性と教養があまり期待できない場合

には、ギリシャ語やラテン語ができる家庭教師に任せます。子どもは家庭教師と一緒に24時間同居生活を送りますから、やはり両親とは引き離されるわけですね。ハイソなご身分にふさわしいのはなんとといってもヨーロッパ文化の起源を十分に知り尽くし身にまとうことなのです。

先生様は家庭教師を兼ねた里親のところに預けられて幼少年期を過ごしています。里親はドゥニ・ウドム・ベルトランという人で、ヨンヌ県オセール郡クルソン・レキャリエール小郡ドゥリエス・ベル・フォンティエヌという人口300人



強の小さな村の外科医さん。小高い丘の上に城壁に囲まれた村の中心がありますが、その丘の下には泉が美しく湧き出でており、その流れがヨンヌ川

に注ぎ込んでいます。内科はまだ十分に完成していない時代の外科医さんは、そりゃあ、なんととっても人々の畏敬の念を集める存在。ベルトランさんはクーランジュのセガン家にとっては生まれた子どもの何人かの名付け親を務めるほどの間柄でした。両家がどのようにして知り合ったのかまでは分かってません。外科医と材木商。基本的に貧困な小さな村では財政的にも権勢的にも、村人たちからすれば、あこがれの存在だったでしょうね。

この時代、お医者様には、医学博士の肩書きを持つ医師、学位は有していないが正規の医学を学んで医師免許を有している医師、そしてとりあえず無免許医師の三種類がおりました。ベルトランさんはこのいずれのタイプの医師であったのかを知るべき記録とは巡り会っていません。ただ、クーランジュのセガン家がたいそう頼りとしていたのは事実です。